

# リンゴ園から うまれた本



▲うさみ のぶこさん

北海道新聞 文化部 次長

宇佐美 暢子

岩手県水沢市の小平林檎園は今、一年で最も忙しい時期を迎えている。一町四反のリンゴ畑には、「千両」や「津軽」が実り、「富士」が収穫される二月まであわただしい日々が続く。働き手は小平範男さん（四五歳）、玲子さん（四三歳）夫妻と、範男さんの両親、三歳になった双子の娘達の歓声が畑に響いている。

このリンゴ園から昨秋、一冊の本が発刊された。宇佐見英治著「明るさの神秘」。宮沢賢治について宇佐見さんがこれまで書いた論文やエッセーに強く惹かれた小平夫妻がまとめた。

夫妻と宇佐見さんの出会いは九年前になる。絵の好きな範男さんが出かけた東京のタゴール展で偶然二人は居合わせた。宇佐見さんは水沢を四年前訪れ、夫妻の案内で賢治ゆかりの地を回り、霧が流れ光が溢れる高原で賢治について語り合った。

「記念に」と夫妻が用意したのは三冊の手作りの本であった。宇佐見さんの賢治に関する論文を古い本からコピーし、和紙の表紙を

つけ和綴じした。表紙の文字は宇佐見さんがその場で墨書、以来、三人がそれぞれ所持する大切な記念の一冊になった。それが今回の本の基礎となった。

人間は太陽の光とは違った別の光がなくては一日も生きてゆけない存在である（悲光より）という宇佐見さんの言葉は夫妻にとつて、農業という自らの進む方向を確認する意味で大きな存在だったという。

正規の流通ルートを通らないこの本を、夫婦はふだん農協などを通さずリンゴを販売しているのと同じように、一冊づつ手渡して行った。

賢治について「明るさの神秘」のあとがきで宇佐見さんはこう述べている。「賢治によつて敗戦直後の絶望から救われ、また、ヘッセと片山（敏彦）先生をとおし、ほんとうのおのれ自身を見出し、先のことを教えられた」。そして小平夫妻について「賢治の精神をもつともよく生きている人だと思つた」。範男さんはリンゴ農家の三代目の一人っ子として生まれた。子供

▶笑顔の小平夫婦と双子の娘さん



のころから農業は大きらいだったという。地元の進学高校に進んだが、学ぶことの意味を見失い、上京して入学した明治学院大学でもウツウツとした日々が続いた。卒業後、東京でアルバイトをし、盛岡の書店に勤めるうちに「悔いなく生きられるかどうかが問題で、百姓を選ぶしか道は無い」と決意して故郷へ戻る。

ところが「大根一本も育てたことのない」範男さんにとつて「畑は私の無知と非力を映し出し、私は自己との対峙を否応なくせまられ、農とは正直な仕事なのだと思うようになった」。心の変遷を範男さんは率直に文書に綴った。「生き方、食へ方、かせぎ方、径書房、一九八三年」の中に収録されている「農に生きる根を掘る―ふるさとリンゴの歌」。三十二歳のときだった。

これを読んで感銘を受け、範男さんに手紙を書いたのが玲子さんだ。今の農業に疑問を持たずに跡取りになったとすればかえってこわい。悩みを突き抜けて農業をやるうとしているところに好感が持

てた」と当時を振り返る。二人の文通が始まった。

玲子さんは江別市のサラリーマン家庭の長女として生まれ、高校卒業後、新聞社の総務部門で働いていた。通勤途中の電車の中で詩集を読むのが目標で、その一つとして出会ったのが宮沢賢治の「春と修羅」だった。

以来、賢治の世界に惹かれ、「農業芸術概論」を読むうちに「岩手で農業を」の思いが強まった。「自分で作って自分で食へる農業が本当にいけると言うことではないのか」と思えるんです」という。

一三年つとめた新聞社を辞め、山荘に住み込みのまかないの仕事などをしながら森で考える数年が続いた。

範男さんとの文通で互いの理解を深め合い、賢治の古い書物を嫁入り道具に、水沢に来て一年になる。結婚式もない静かなスタートだった。

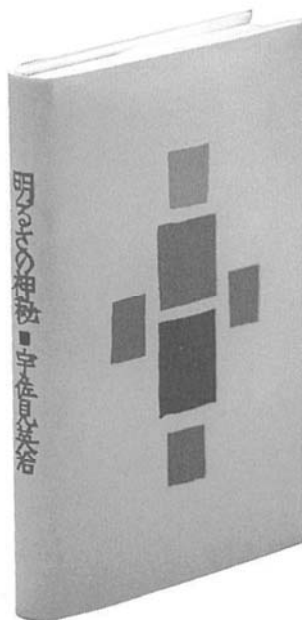
「農業の現場にいられる幸せがある。農業をしていると良く見えるモノがある。リンゴを手渡しながら、人と人のつながり、広がり



◀おばあちゃん  
おじいちゃん  
と一緒に



▶夫婦でリンゴの収穫



▲明るさの神秘  
宇佐見 英治 著

もおもしろく思っている」と楽しそうに言う。

「農業芸術概論」は、「ずいぶん忙しく仕事もつらい」農民達と共に、もつと明るく生き生きと生活の道を見つけたい」と考えた賢治が著した。

宇佐見さんの言う「太陽の光とはちがう別の光」は人間をほんとうにいきる方向に導くであろうと、玲子さんは思ったという。

範男さんも「明るさの神秘」のしており、「農業に未来があるかどうかは、この場で述べることではありません。けれども遠くを見ていなければ農業をやり続けることが困難なことは事実です。遠くを見ること―そのための視界が開かれたのは、私の場合、宇佐見先生

の『雲と天人』との出会いによってでありました」と書いています。

農家が農業として自立していくのが難しいのが今の日本の現状だ。小平林檎園が、除草剤は使わず農薬を出来るだけ減らして育てたり、リンゴを、農協を通さずすべて個人販売で直接手渡す方法を選択したのは、そうした日本の農業の問題に、ささやかだが抵抗しているからだ。

小平さんの両親が働くそばで子供達が駆け回る

岩手県水沢市「小平林檎園」

昨年11冊出版した「明るさの神秘」の一冊